

折々の記 No172 : 陣中見舞い!

(H23/4/29 記)

大震災が発災し、5 旅団が石巻から牡鹿半島に展開して救援活動を実施中であり、陣中見舞いを思い立ち、本朝0500 出発、東北道から三陸道経由で旅団指揮所がある反町分屯地に車両にて前進した。片道約 400km の長丁場だ。このような時には家内が運転出来るのは有難いことである。朝が早かったからであろうか、渋滞することもなく、ひるまえには旅団指揮所に到着した。指揮所で、旅団長や幕僚長から状況の説明を受け、埼玉の地酒数本の陣中見舞いを差し上げて、旅団司令部諸官を労った。長居は邪魔でもあり、また被災地を物見遊山で見学することも不謹慎であり、早めに引き上げた。夕刻には帰宅した。当初、松島付近で宿泊をもと思わぬでもなかったが、ボランティアが多かったからか確保叶わなかった。以下、若干の所見を述べたい。

1 被災地の惨状に愕然

東北道も補修の跡が生々しく、仙台に近づくに従いブルーシートを展張した家屋 もちらほらと見られた。



名取川沿いに南下し、三陸道にいった地域は、津波の襲来に全てを失った若林区である。三陸道の南側は写真のような状況であるが、北側はさしたる被害を受けているようには見えなかった。三陸道が津波を塞ぎ止めたようだ。また三陸道を反町に向い前進したが、ある所以遠は全く被害を受けていないようだ。ある所は惨憺たる被害を受け、別な所は全く被害がないというのは、如何なる神の采配、思し召しなのかと思いたくなる。何が吉凶を分けるのか?

2 旅団指揮所にて



旅団指揮所は、あの有名は三景の一つである松島町の初原に所在する陸上自衛隊反町分屯地の体育館である。旅団の隊員は大和市の総合運動公園に宿泊し、石巻市の一部と牡鹿半島を担当地域として災害救援活動を実施中である。旅団の約半数の隊員が当地に来援している。写真は向かって左が旅団長、右が幕僚長である。作戦図の前で、撮影。以下幾つかの所見を述べる。

① 災害派遣でこれ程長期に亘る任務に従事した経験はなく、且つ慣れぬ土地での ストレスの溜まる任務にも係わらず、隊員の士気は高く、被災者の為を第一義 に考えて活動しており任務遂行に支障はない。釧路 27 連隊は道東警備のため釧路に所在しているが、隊員諸官からは災害派遣に参加させて貰いたいとの願望が強い。

② 行方不明者の捜索が難航している。旅団が捜索した地域には、行方不明者は一人とも居ないと確信できるが、他の地域で旅団が捜索してみると見つかる場合もあり、難しいものようだ。従って、人命救助段階から次の段階への移行が困難である。

③ 牡鹿半島地区の生活支援活動は、地域コミュニティが健在で、行政とも密接に 連携しているので、スムーズに実施できる。物資等を決められた地点に届けると 後は彼らが関係個所にデリバリーしている。一方、地域コミュニティが崩壊し、行政も真面に機能していない地区における生活支援活動は、色々あってやり難い。地域エゴや個々人のエゴが見受けられることもあるようだ。

④ 児童館の子供達との交流が深まった。音楽隊が児童館の子供たちの為に慰問演奏を行う等の支援活動を行った御礼にと、子供達から自衛隊の皆さん有難うとの 寄せ書きが寄せられた。寄せ書きは、作戦図近くに掲示されていた。写真の旅団 長の左肩後方にその一部が見える筈だ。何れにしても、災害派遣を通じ地域住民 との交流が始まり、それが永続することを願う。

⑤ 旅団の活動地域を訪れたVIPは、菅首相、北澤防衛大臣、折木統幕長に火箱 陸幕長と何故か多い。隊員諸官の地道かつ黙々たる活動を激励して頂くことは、 何にも増して士気高揚になる。

⑥ 仮設住宅の建設が思うように進んでいないようだ。住み慣れた地域から離れた くない、然し、建設に適当な場所はないというジレンマに陥っているとのことである。山を削って仮設住宅を建設しようかとの話もあるとか。

⑦ ライフラインの復旧につれて生活支援のニーズも低減する筈だが、下水道の復 旧が思うよう任せず引き続き生活支援のニーズも高い。

⑧ 何れにしる、本災害派遣を修了し撤収する条件が見えない。先の見えない異郷 での長期にわたる過酷な任務遂行する隊員諸官に頭が下がる。このような隊員や 部隊に国家は如何にして報いるのであろうか？勿論彼等はそんな見返りを求めて いる訳ではない。彼らの無償の行為に荣誉と名誉を与えるべきである。